

オールコックが観た歌舞伎

小谷野敦

幕末期の英国公使、ラザフォード・オールコックは、日本滞在記『大君の都』(The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan)で名高いが、その中に、万延二年(一八六一) 香港から長崎に戻った後、四月二十二日長崎を発って、下関から海路兵庫へ、以後陸路をとって五月二十七日に江戸へ到着する間に、大坂に立ち寄って芝居見物をした記述があり、芝居の筋も詳しく書いてある。「当地では、オランダ商館長が旅行の道すがら劇場に寄ってゆくのが長年の慣習だった。そこでこの前例に便乗して、われわれも劇場へ行ったのである」(山口光朔訳、岩波文庫、中巻、一九六二)。同行したのは、通詞の堀達之助らである。「午前一〇時開演、午後六時終演」ということで、その長さオールコックは驚く。結果として、「われわれは、一〇時と一時のあいだに着いて、一時間半ほどいた」というのだから、ほとんど一部分しか観ておらず、というも途中で「私の同僚 my colleague 」が退屈して立ち上がってしまったからである。

ところで、この芝居は何であり、劇場はどこだったのか? 中村哲郎『西洋人の歌舞伎発見』(劇書房、一九八二)には、五月に堀江芝居で上演されていた『勝鬨【みばえ=くさかんむりに孚】源氏』ではないかと推定されているが、確証はないとある。伊原敏郎『歌舞伎年表』第七巻(岩波書店、一九六二)で見ても、この年の四月、五月には角の芝居での上演はなく、四月は堀江芝居で「筑紫琴夫」「鬼一」「千両幟」、天満芝居で「蒼八總」「睦玉川」「雁金五枚」、五月は堀江芝居で「みばえ源氏」、切に「極彩色」、竹田芝居で「恋女房」「山姥」「御堂前」「伊勢音頭」、いなり芝居で「花發船」「戀の玉章」とある。この内、オールコックの描写に該当しそうなのが「みばえ源氏」だということになる。これを確認してみよう(1)。その前に、先の、オールコックの観劇を邪魔した「同僚」だが、山口はこれをオランダ総領事のデ=ウィットとしている。この旅行には、英国長崎領事モリソンと画家チャールズ・ワグマンが同行しており、オールコックの書き方というのはどうにも自分用で、誰と一緒にいたのか分からないことが多い。しかし佐野真由子氏に伺ったら、この二人であれば、退屈だと言って立ち上がるなどという無礼を上役のオールコックに対してすることはないだろうから、やはりデ=ウィットだろうということだった。

さて、まずオールコックの文章から、芝居の筋に当たる部分だけを抜き出してみる。むろん、その他の部分も興味深いのだが、割愛する。まずオールコックは、「『粉屋と職人』(Miller and His Men) が『四〇人の盗賊』(Forty Thieves) に似た芝居が上演された。だが、恋愛ごとは多少洗練味を欠き、殺しやけんかの場面が多かった」としている(2)。以下、岩波文庫版を使うが、原文を参照して、適宜[]で私訳を示す。

第一場は、道ばたの旅館である。主人は留守で、主婦と女中が主人の帰るのを待って話し合っているようである。主人は、すぐ帰ってくるが、疲れきって考えにふけている様子である。女は、妻としては当然のことながら、なにを考えているのかとたずねる。しかし、彼女がどうすかしてみてもだめで、主人はまもなく着く旅人のために部屋を用意するよう

にと命じて、妻と女中を退らせる。

舞台は、街道近くの人里離れたところになる。二人の男が、大切な荷物を積んだ馬を引いてやってくる。ひとり若くて主人らしく、もうひとり腹心の従者である。(略) すこし奥に墓と墓標がある。そしてこれが、どうやら二人の男の旅の目的らしい。若い男は、この場で殺された自分の母の霊に詣で、仇をとることを誓っている。こうしているあいだに、かれらは人の近づく音を聞きつけ、木立ちのうしろにかくれて、あとからやってきた人相の悪い二人の男をながめる。この二人組のかしらがふり返って、立っている木の墓標を見る。これには、普通死者の名と賛辞を記してあるのである。かれはこの墓標を見て、その文字を読むやいなや、地面から引き抜いてへし折り、破片を道路にばらまく。これでかれが殺害者であることがわかる。その間、かくれている若者とその従者のあいだに、たいへん多くのわき芝居が演じられている。若者は、母を殺し、いままたこの非道を行った男を襲おうという衝動に駆られるが、忠僕がこれを押しとどめる。二人の悪人がいってしまうと、若者と従者が出てくる。母の墓がこのように冒瀆されたことから、かれはこれまでわからなかった下手人を見つける。そしてかれが、強力な一国の浪人(Lonins)の首領であることを知る。かれは、ただちに復讐の誓いを新たにする。つぎの場は、さきの旅館の入り口であり、荷物をもった旅人が着く。箱の二つは財宝であるように見え、宿の主人はちょっと怪しいほどこれに注意をひかれる。かれは、なにかとお節介を焼いてその箱をもってはいらせ、浪人がうろついているので道中がたいへん不安だと客に語る(略)。「彼がそれを知っているのも当然なのだ！」宿の主人の様子が、警戒を怠らぬ従者に疑念をいだかせる。そこでかれは、若い主人に注意するように警告する。夜が迫っているから、よそへいくことを考えるにも遅すぎるからである。だが、従者は、一晩中戸口で見張りをするという。従者は、ひとりになってから、「彼が予想している宿の主人の陰謀」にたいしてどうすればいちばん安全かということについて思いをめぐらしている。するとそのとき、女中のひとりがのぞきこむ。男前の客に大いに魅せられたのであろう。そして、ややあって、かれがひとりであるのを見て、彼女は思いきってそっとはいってきて、いい寄りはじめ。最初のうちは、かれはそのような求愛のナイーブさや、そのあとの思い切った愛の告白をおもしろがる。しかし、まったくかけ離れたことを考えているので、とうとうかれはうるさくなって、物を与えて彼女を追い払おうとする。(略)

ところで、また幕が上がると、こんどは、結末はどうであれ、とにかく日本人がとくによろこぶ場面になる。勇敢な英雄的な行為、流血と自刃、というものは、わたしに理解できたかぎりでは、日本人のほとんどすべての物語の主成分ともいべきものである。夜の場面で、灯りがともっており、宿の主人とその妻が旅館の前にいる。そこへまた、二人の旅人が着くが、この客たちは主人にとってきわめてありがたい客のように見える。夜番が立っていないという口実で、主人は妻にちょうちんをもたせ、見回りにゆかせる。それから、新しい客に近づいて話をはじめ。すると客たちは、主人が昔の仲間であることに突然気づく。この男は、かつて司直の手をのがれるために、かれらの仲間から離れて逃げた男であることにかれらは気づく。主人はごまかそうとするがむだで、結局そうであることを認め、かれらに会ってたいへんうれしいという顔付きをする。それから主人は、かれらをもてなすために酒(サキ)をとりにゆく。ところが、じつはこっそり裏手から帰ってきて、二人の首をつかみ、あつというまに手際よくかれらの首を絞めるか、あるいは引

っこ抜いてしまうかして、死体を両側へ投げ捨てる。ちょうどそこへ妻が帰ってきて、なにも異常のないことを告げる。

舞台はまわって、例の若い客の寝室になる。忠実な従者が警戒しているところらしい。かれは、長い恐ろしい刀を抜いて手にとり、刃をためして、いつでも使えるように刀を膝のところに横たえる。一方、主人はなかで寝ている。もう一ぺん舞台がまわって、また外の場面になる。そして、平土間のはしの壇から、賊の頭目が派手に登場してくる。かれは輝くよろい一式を身につけ、たいへん恐ろしい様子で目をくりくりまわし、観衆に向かって恐ろしいしかめ面をしながら、巨大な槍を振りまわして、足ぶみをする。(略)かれらは、舞台について宿の主人と会う(主人は、いまでは一隊の仲間になっている)。主人は、二人の旅人の死体をみせて、今夜自分がやったことを話し、それから宿には金持ちの若い客が従者をひとり連れて泊っていて、財宝のはいった箱を二つもっていると報告する。もちろん、一隊を集めて宿に押し入り、旅人を殺して持ち物を強奪することがきめられる。それから集合の場面がつづく。約二〇人の浪人のひとりひとりが首領に忠誠を誓い、大げさな美辞麗句をつらねて演説する。(略)舞台は暗くなり、中庭を囲む塀のふちにひとりの男が現われる。かれは、素早く塀を降りてくる。そのあとに、まだ数人がつづく。そしてかれらは、家に押し入ろうとして走ってくる。(略)

浪人たちが近づくと、部屋のふすまが突然うしろに倒されて、日本のどの家にもある縁側の上に従者が刀を手にして現われ、勇敢に戦う。そして最後に、主人の部屋の方へしりぞく。場面が変わって、主人じしんが現われる。いままで粗末な平服を身につけていたのは、変装して旅していたらしく、こんどは目もさめるような武具をまとっている。よろいをつけ、羽毛のついたかぶとをいただき、刀をひらめかして、目にも止まらぬ早わざで襲撃者を右に左に切り伏せる。それから、つぎに二人、三人を相手にして、一隊と渡り合う。そして、異様なしかめ面とこっけいな身振りを見せるが、これがどうやら一般の人びとにはもっとも人気があるらしい。すでにかれのまわりに敵の死体が累々と横たわったころ、恐るべき首領がついにみずから姿を現わす。部下が殺されたことをたいへんにがにがしく思ってしばらくしゃべったあと、かれは死闘をはじめべく、慎重に身がまえる。(略)長い闘いののちに、かれは息をつくためにしばらくの間引き退って、相手は人間ではなくて悪魔だとののしる。その間に、宿の主人が現われるが、あつというまに切り伏せられる。ついに、再度の闘いで首領じしんも倒れ、宿の主人も首領もいまやまさに止めを刺されようとするときに、宿のおかみが現われて、勝った若者の足もとに身を投げて情けを乞う。(ここで同僚が退屈して帰ると言いだす。結局どうしたのか分からないが、あと少しだけ観て席を立ったらしい)

若い主人は、最後のことばのなかで、泣いている宿のおかみに向かって、たいへんお気の毒だがこの二人の悪人の犯した罪は許しがたいものであり、浪人の首領は自分の母を殺害してその墓を冒瀆し、宿の主人は自分の客の殺害をくわだてたのだという。そこで、この二人はその場で殺されるか、あるいは司直の手に渡される。この辺のことはわたしにはのみこめず、結局あきらめてしまった。(山口訳、三八九 - 三九六頁)

これが『勝鬨みばえ源氏』だとすれば、立役の若者は牛若丸、その従者は金売り橘治、盗賊の首領は熊坂長範である。この物語の古い原典は『義経記』で、遮那王と名乗る十六歳

の義経が、吉次とともに東北下向の途次、近江国鏡の宿で、出羽国の盗賊・由利太郎と越後国の藤沢入道の一党七十人が、吉次の持つ財宝目当てに襲撃し、遮那王の働きで首領二人を含む五人を討ち果たしたという、承安四年の物語である。この盗賊が熊坂長範になるのは、謡曲「熊坂」で、美濃青墓・赤坂の宿でのことに変わっている。これが歌舞伎に潤色されたのは、天保八年（一八三七）初演の西沢一鳳『熊坂物見松』だが、浄瑠璃では延享元年（一七四四）三月に竹本座で『児（ちご）源氏道中軍記』の内に脚色されている（一世・二世竹田出雲・三好松洛）。浄瑠璃としては、明和三年（一七六六）に、この熊坂襲撃の場である二段目が再演されているが、文化十三年（一八一六）八月に、大坂中の芝居で、これと『太政入道兵庫岬』（元文二年〔一七三七〕十月、竹本座、二世竹田出雲、竹田正蔵）を取り混ぜて、奈河晴助の台本で『勝鬨みばえ源氏 - 鞍馬山に妹脊の初陣 - 西八条に二世の続託』として歌舞伎上演されたのが始めである（3）。全体の筋は、平清盛が厳島明神から拝領した長刀の紛失に始まり、牛若、吉次の奥州下向、佯狂の平宗盛が知盛に本心を明かし、奴に化けていた蒲冠者範頼の正体を見破り、最後は能登守教経を中心とした芝居になる。オールコックが観たものでは、牛若は二世嵐璃【かく=王玉】（一八一二-六四）、熊坂は三世嵐吉三郎（一八一〇-六四）である。中村によると、吉三郎代々の当たり役だったらしい。いずれも名優の部類だが、もちろんオールコックはそんなことには気づいていない。

さて『みばえ源氏』の台帳は、東京大学国語研究室にあったので、読んでみた。三ツ目がそれに当たるが、当然ながら初演とは違うところもあるだろう。オールコックが宿屋の主人と言っているのは、美濃青墓宿の山中屋七兵衛、実名壬生の小猿である。最初の場面は山中の街道筋、馬子に化けた金売橘治と牛若丸が登場し、そこへ庄屋が、下司の伴内を案内してきて、そこに立っている卒塔婆は、熊坂長範という盗賊に襲われて命を落とした女人のもので、後へ通り掛かった六十六部が建てて供養したのだが、女人は常磐御前といった、と話す。物陰で聞いていた牛若丸が愕然とする。伴内は平家方なので、それは源氏の女だということで卒塔婆を引き抜き「春光院尼覚慈釵大姉俗名常盤」と読む。牛若丸は悔し涙に暮れるが、後の源氏再興のため耐えるよう橘治に言われ、二人は引っ込む。場面は代わり、宿屋の主人七兵衛が帰ってきて、女房、下女らと言葉を交わし、熊坂という強盗が出没しているから気をつけるように言う。オールコックが観たものではこの場が先に出たようだ。その後、ヤケ下ノ小六、麻生松蔵が現れ、平家の与力として、小猿こと七兵衛を詮議しようとするので、二人を絞め殺す。さて、熊坂が、十六七人の手下とともに、橘治の金目当てに押し入ってきて、橘治、牛若丸と戦い、小猿も一味であると知れ、熊坂、小猿ともに牛若丸に斬られる。小猿の女房が命乞いをするのはこの時だ。牛若丸は母を殺された恨みがあるので許さず、自分は源氏の牛若丸だと名乗る。すると初めて知った七兵衛が驚き、奥の塗籠から常磐御前を連れてきて、母子の対面となる。実は熊坂も七兵衛も源氏に心を寄せる者たちで、七兵衛こと小猿は、源氏譜代の備前三郎光之の倅光重と名乗る。軍資金集めのために盗賊を働き、常盤は匿って、供養の金を集めるため卒塔婆を建てておいたのだ。熊坂は死に、牛若丸はその忠義を讃えて、再び奥州へ旅立つ。

これでオールコックが観た芝居が『みばえ源氏』の三ツ目であったことは確認されたが、彼が、歌舞伎特有の「戻り」の趣向を、同僚がもう帰ると騒ぎ、通詞がうるたえている中で見ていてよく分からなかったのも無理はない。あるいはこの少年が、日本人の間の伝説

的英雄ともいふべき人物であることも分からなかったわけで、この知的好奇心旺盛な英国人から、日本の歌舞伎のどんでん返しの趣向をじっくり観察して比較演劇学的考察を行う機会を奪ってしまったデ=ウィット(?)は文化交流史上において随分重い罪を作ったと言わねばなるまい。

(1) 佐野真由子『オールコックの江戸』(中公新書、二〇〇三)には、角座へ入ったのだろう、と書いてあるが、佐野氏に確認したところ、先例に倣ったとみたのみで、特に調べなかったそうである。

(2) 『四〇人の盗賊』には、山口の注として「イギリスの演劇作家ジョージ・コールマンの作。一八〇五年初演」とある。これは同名の劇作家の息子で、George Colman, the younger (1762-1836)のことだが、The Forty Thieves は、R. B. Sheridan および C. Ward との合作の grand romantic drama で、一八〇六年、ドルリー・レイン劇場初演である(Plays by George Colman the Younger and Thomas Morton. Ed., Barry Sutcliffe. Cambridge: Cambridge University Press, 1983)。もう一つの『粉屋と職人』は、英国の画家・劇作家の Isaac Pocock (1782-1835)の作で、一八一三年初演である。これも、ボヘミアを舞台として、粉屋とその手下たちが山賊だという話だ。これには英国の作曲家ビショップ Sir Henry Rowley Bishop (1786-1855)のオペラがあるが、今では上演されないので聴く術がない。ビショップは、米国の劇作家 John Howard Payne (1791-1852)の歌劇 Clari, or the Maid of Milan (1823) も作曲しており、その中でヒロインが歌う Home, Sweet Home、つまり「埴生の宿」が、日本でも西洋でも、ほぼ今日まで残る代表作であることを付け加えておく。

(3) 児玉竜一「復活 義太夫狂言の演出 - - 芝翫の『石切梶原』・璃寛の『勝鬨みばえ源氏』ほか - - 」(『歌舞伎 - - 研究と批評』一六号、一九九五年十二月)に記述がある。『勝鬨みばえ源氏』台帳の借覧に当たり、東大国語研究室助手の常盤智子氏にお世話になった。参考として、東大教養学部国文学研究室に所蔵されていた『児源氏道中合戦』も披見させていただいた。